

富岡謙蔵氏蒐集 瓦経十七片(本館蔵)について  
富岡益太郎氏寄贈

小町塚経塚資料

昭和五十五年十二月に富岡謙蔵氏が蒐集された十七片の瓦経を子息の益太郎氏より本館に寄贈を受けた。その時点ではこれら十七片の瓦経については出土地が明確でなかったが、瓦経の規格や書風などを比較検討したところ、いわゆる小町塚瓦経の可能性が強く、ここにその経緯を報告して大方の御教示を仰ぐこととしたい。

三重県伊勢市浦口町の通称小町塚から、承安四年(一一七四)在銘の瓦経が出土したことは、古く江戸時代から識者の間では知られていた。天保四年(一八三三)の安岡親毅の『五鈴遺響』に、瓦経が掘り出された状況が誌されているが、この時すでに好事家が分蔵していたことと、破損していたので全貌を知り得なかったことが惜しまれるとしている。この一例をもってしても、当時からすでに小町塚瓦経の経塚としての全貌を把握することがむづかしい状況にあったといえよう。明治二十二年に神宮司庁から刊行された『神都名勝誌』の巻二の「天神山」の項に、「田原の南にあり。往昔麓に菅神の廟ありしを以て名づく。土人経塚と称す。此の地より曼荼羅・梵字・仏経等を彫刻せる古瓦を掘出すこと毎々たり。中に承安四年の文字現はれたる物あり。」とあり、瓦経塚としての記述は一切な

く、これまで不明の部分が多かった。

昭和三十七年五月に文化財保護委員会が神宮を中心として文化財調査をした際、明治、大正年間にこの経塚を発掘した大西源一氏などとともに保坂三郎氏らが調査され、その結果について、「現地は海抜約二〇メートルの洪積砂礫層よりなる海成段丘とおほしき平面の北端で、北に広くひろけた官川下流の平野を見下ろす、いかにも経塚のありそうな地形的位置である。古くからこの台地のすぐ東下に旦過<sup>たんが</sup>という村があり、現在は伊勢市浦口町旦過に属している。」と結んでおり、実態は依然として不明であり、瓦経が出土した付近の天神山と呼ばれるところは墓地にされて、往昔の感はなく、遺跡としては確認できないのが現状である。さらに最近この小町塚から直線距離にして七キロメートルほど離れた菩提山でも瓦経が発見されたとの報告がある。もともとこの菩提山から瓦経が発見されることについても江戸時代からその伝承があったが、確かなことは不明であった。

こうした状況のなかで、地元の和田年弥氏をはじめ、古川真澄氏、津田守一氏などが精力的にこれら小町塚や菩提山の瓦経について調査され、それぞれ論考を発表されている。<sup>注1</sup>一方、網干善教氏は諸家に分蔵されている小町塚瓦経の復原的研究をすすめられるなど、<sup>注2</sup>今後、従来不明であった小町塚瓦経(菩提山も含めて)について明らかにされるであろう。

一 現状

經典内容によってこの十七片の瓦経を分類すると次のようになる。

(一) 妙法蓮華經（以下法華經という）三片

(二) 大毘盧遮那成仏神變加持經（以下大日經という）四片

(三) 蘇悉地羯羅經別本二（以下蘇悉地經という）三片

(四) 金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身内証智眷屬法身異

名仏最上乘秘密三摩地礼懺文（以下金剛界礼懺文という）二片

(五) 般若波羅蜜多心經（以下般若心經という）一片

(六) 悉曇瓦經二片

(七) 願文二片

なお、経文の校合は、『大正新脩大藏経』に拠った。ゴチックの部分が現存部分である。

(一) の法華経は方便品第二、譬喻品第三、信解品第四の一部であることが確認された。各片の法量、現状、経文は次の通りである。

① 法量 最大縦五・四、横五・九、厚さ平均一・七（単位はいずれも糶、以下同様）、左右欄外幅表裏ともに一・七、下欄外幅表二・〇、裏一・七、行間表裏ともに一・八

焼成は堅質で灰白色を呈し、表裏ともに縁に面取りを施す。

(表)

爾時大衆中有諸声聞漏尽阿羅漢阿若憍

(裏)

陳如等千二百人及発声聞辟支仏心比丘

比丘尼優婆塞優婆夷各作是念今者世尊

經典どおりに行十七字詰で陰刻される。

② 法量 最大縦二〇・二、横一七・八、厚さ二・三、二・五、左右欄外幅表裏ともに一・七、下欄外幅表裏ともに一・九、行間表裏

ともに一・八、二・〇

焼成、色調、面取りの方法は①と同様である。

(表)

老病死憂悲苦惱而為三界火宅所燒何由能解仏之智慧舍利弗如彼長者雖復身手有力而不用之但以慇懃方便勉濟諸子火宅之難然後各與珍宝大車如来亦復如是雖有力無所畏而不用之但以智慧方便於三界火宅拔濟衆生為説三乘声聞辟支仏仏乘而作是言汝等莫得樂住三界火宅勿貧羸弊色声香味触也若貧著生愛則為所

(裏)

焼汝等速出三界当得三乘声聞辟支仏仏乘我今為汝保任此事終不虛也汝等但当勤修精進如来以是方便誘進衆生復作是言汝等当知此三乘法皆是聖所称歎自在無繫無所依求乘是三乘以無漏根力覺道禪定解脫三昧等而自娛樂便得無量安穩快樂舍利弗若有衆生内有智性從仏世尊聞法信受慇懃精進欲速出三界自求涅槃

③ 法量 最大縦一四・二、横一〇・八、厚さ平均一・六、左右欄外幅不明、下欄外幅表裏ともに二・〇、行間表裏ともに一・八、二・〇  
焼成、色調、面取りの方法は①と同様である。  
(表)

出入息利 乃徧佗国 商估賈人 無処不有  
千萬億衆 圍繞恭敬 常為王者 之所愛念  
羣臣豪族 皆共宗重 以諸緣故 往來者衆  
豪富如是 有大力勢 而年朽邁 益憂念子  
夙夜惟念 死時將至 癡子捨我 五十余年  
庫藏諸物 当如之何 爾時寤子 求索衣食  
(裏)

不信我言 不信是父 即以方便 更遣余人  
眇目矧陋 無威德者 汝可語之 云当相雇  
除諸糞穢 倍与汝価 窮子聞之 歡喜隨來  
為除糞穢 淨諸房舍 長者於牖 常見其子  
念子愚劣 樂為鄙事 於是長者 著弊垢衣  
執除糞器 往到子所 方便附近 語令勤作

(二)の大日経は卷二、卷三が各二片あることが確認された。

④法量 最大縦一四・五、横九・八、厚さ平均一・九、左右欄外  
幅表二・一、裏一・三、上欄外幅表二・一、裏二・〇、行間表裏と  
もに一・七〜一・九

焼成、色調ともに①に同様であるが、縁の面取りがかなり顕著で  
ある。

(表)

(一行アキ)

閻伽真言(日)

南麼三曼多勃駄喃一伽伽上娜三摩引三摩

ニ莎訶三

(裏)

秘密主復聽 繫除散乱風 阿字為我体 心持阿字門  
健陀以塗地 而作大空点 依於嚩曳方 闔以捨囉梵  
思念於彼器 大心弥盧山 時時在其上 阿字大空点  
先仏所宣説 能縛於大風 大有情諦聽 行者防駛雨

表の最初の一行アキとしたところは陰刻された経文を消したのであるが、松田家所蔵の大日経卷二の八枚目と比較して、経文に矛盾はない。表三行目の「駄」は經典では「駄」とある。裏欄外には「大日」とあるが、これは枚数の丁付であり、さきの松田家蔵に「大日二之八」とあるので、これに続くのが④で「大日二之九」と陰刻していたのであろう。

⑤法量 最大縦九・三、横六・二、厚さ平均一・八、左右欄外幅  
表一・二、裏一・五、行間表一・九〜二・〇、裏一・八〜一・九  
焼成、色調とも①と同様である。

(表)

思惟囉字門 大力火光色 威猛熾焰鬘 忿怒持遏伽  
随所起方分 治地起蔭雲 断以慧刀印 昏蔽尋消散  
行者無畏心 或作薊羅劍 以是金剛槩 一切同金剛

(裏)

世尊樂欲於此大悲藏生大漫荼羅王如所  
通達法界清淨門演説真言法句爾時世尊  
無壞法爾加持而告諸執金剛及菩薩言善

表の二行目の「起」は經典では「興」とある。裏の経文は陰刻された現状から復原したが、經典では二行目と三行目で改行があるが、⑤は連続して陰刻される。裏欄外に「大日二卷十」と陰刻されてお

り⑤は巻第二の十枚目で、さきの④に続く破片であることがわかると共に、この④と⑤が確認されたことによって、大日経巻二の枚数がそろったことになった。

⑥法量 最大縦一八・二、横八・五、厚さ平均一・九、下欄外幅表裏ともに一・六、行間表一・八〇一・九、裏一・九

焼成、色調ともほぼ①と同様である。

(表)

爾時世尊復住三世無礙力依如来加持不思議力依莊嚴清淨藏三昧即時世尊從三摩鉢底中出無尽界無尽語表依法界力無等力正等覺信解以一音声四処流出普遍

(裏)

離熱者前而説頌曰

奇哉真言行 能具广大智 若遍布此者 成仏両足尊  
是故勤精進 於諸仏語心 常作無間修 淨心離於我  
爾時薄伽梵 復説此法句 於正等覺心 而作成就者

⑥は經典どおりに改行されており、巻第三の三枚目で、二枚目に東京国立博物館蔵、四枚目に関西大学考古学研究室蔵があり、これらと比較すると経文も矛盾なく連続している。

⑦法量 最大縦九・四、横八・三、厚さ平均一・八、行間表一・八〇一・九、裏一・八〇二・〇

焼成、色調とも①と同様である。

(表)

定仏於定中顯示遍一切無能害力明妃於

一切如来境界中生其明日

南摩薩婆怛他引葉帝弊<sup>毘也反</sup>薩婆目契弊<sup>同上</sup>  
阿迷三鉢囉迷<sup>四</sup>阿者麗<sup>五</sup>伽伽泥薩麼<sup>二合囉</sup>

(裏)

妃八遍從座而起旋繞漫荼羅入於内心  
以慈大悲力念弟子阿闍梨復以羯磨金  
剛薩埵加持自身以嚩字門及施願金剛  
已当面大悲藏生大漫荼羅彼安祥在於

表は陰刻された経文から、このように復原できるが、經典どおりに改行されていない。裏の二行目の「非力念弟子」は經典では「悲力念諸弟子」とあり、「諸」が脱字したと思われる。⑦の前後が松田家、国学院大学にそれぞれ所蔵されており、さきの⑥と同様、経文は矛盾なく連続している。

(三)の蘇悉地経は巻上が一片、巻下が二片あることが確認された。小町塚瓦経については蘇悉地経は別本一と別本二が書写されているが、この三片はいずれも別本二である。

⑧法量 最大縦九・六、横五・七、厚さ平均一・七、上欄外幅表一・六、裏一・七、行間表一・八〇一・九、裏一・八

焼成、色調とも①と同様である。

(表)

日影不転或多聚落一神祠処或於十字大  
路之辺或龍池辺如是之処説為勝処或仏  
經行所至之国如是之方速得成就但有国

(裏)

曠恚乃至天神不応生瞋亦不瞋嫌余持真

言者於諸真言不応擅意乃至功能及諸法  
則而分別之於諸真言及以法則深生敬重

⑨法量 最大縦一六・九、横七・四、厚さ平均二・二、行間表裏  
ともに一・八〜二・〇

焼成、色調とも①と同様である。

(表)

以青茅草而作其座座高四指闊二襪手長  
十六指如此之座初念時及持誦時皆応

受用或用迦<sup>去声</sup>勢草或用余青草等或隨部

法取乳樹木最要妙用作床座量亦如上而

(裏)

余諸仏菩薩相好功德其讚嘆文応用諸仏

菩薩所説歎偈不応自作讚嘆既已起自誠

心懺悔諸罪我今歸命十方世界諸仏世尊

羅漢聖僧及諸菩薩証知我等自從過去及

表の復原では二行目が十六字詰になっているが、これは「初念時」  
が經典では「初念誦時」とある「誦」が脱字のためになったと予想  
されるが、三行目の最初の「受」が陰刻されていた可能性もある。  
このことは四行目の「最要妙用」が經典では「最為要妙用」と「為」  
が脱字となっているのと同様である。二行目の「此」は經典では  
「是」とある。裏は經典どおりに陰刻されている。

⑩法量 最大縦七・五、横四・九、厚さ平均一・九、左右欄外幅

表一・五、裏一・八、行間表一・八、裏一・七

焼成、色調とも①と同様である。

(表)

折羅法者以如鎖鉄作拔折羅長十六指兩  
頭各作三股或紫檀木作或三宝作所謂金

(裏)

淨不食持齋求善警界而取諸物所説須物

隨方処所有是物者而就貴貨不離價值而

表の一行目の「如」は經典では「好」とあり誤写であろう。この復  
原は、⑩と同一個体の破片が長野県の常楽寺美術館に所蔵されてい  
るので、これと合わせて行った。常楽寺美術館蔵は従来から小町塚  
のものとして周知のものであり、さらにこの⑩と前後する小町塚の  
ものが、国学院大学と松田家に所蔵されており、比較の結果、経文  
の矛盾はなかった。裏の欄外に「蘇後下之□□」と陰刻されてい  
る。

⑪の金剛界礼懺文は二片あり、うち一片の裏は願文奥書の部分に  
なっている。

⑪法量 最大縦二・二、横四・一、厚さ平均一・七、下欄外幅  
表裏ともに一・七、行間表一・七、一・九、裏一・八

焼成はやや軟質で、色調は表が灰白色、裏が灰黒色を呈する。

(表)

法界同一体性金剛界生身一切諸仏

南謨一切如来適悦心金剛嬉戯等尽虚空

(裏)

遍法界一切供養雲海菩薩摩訶薩

南謨一切如来勝莊嚴金剛花等尽虚空遍

表の一行目の「金剛界」の「界」は經典にはなく余分に陰刻したの

である。

⑫法量 最大縦六・九、横一〇・八、厚さ平均二・〇、下欄外幅表一・五、裏一・九、行間表裏ともに一・九

焼成は軟質で、色調は灰黒色を呈する。

(表)

南謨一切如来堅固智金剛鎖菩薩等尽虛

空遍法界一切使者菩薩摩訶薩

南謨一切如来歓楽智金剛鈴菩薩等尽虛

空遍法界一切随順菩薩摩訶薩

(裏)

西□

藤原能成

女愛子等

僧良中

⑫と⑪は連続した破片であるが、⑫の表のゴチックのところのみで経文を確認すると同じのが前四行にあるので正確な復原とはいえないが、裏が奥書になっているので、表、裏の行数からいえば、この復原で正しいようである。

(甲)の般若心経は一片が確認された。

⑬法量 最大縦九・四、横六・八、厚さ平均一・七、行間表裏ともに二・〇

焼成、色調とも⑫に同様である。

(表)

蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離

顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅

蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若

(裏)

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提

裏に空白があるのは經典どおりである。

(丙)の卍字を連記した悉曇瓦経は現在のところ小町塚からしか出土していない。

⑭法量 最大縦五・八、横二一・二、厚さ平均二・二、上欄外幅二・三、右欄外幅二・三、行間一・七、二・〇

焼成は堅質で、色調は灰白色を呈する。裏には陰刻されず不整形のまま仕上げられているが、このことは悉曇瓦経に共通している。

⑮も同様である。

⑮法量 最大縦一一・七、横四・二、厚さ平均一・九、行間一・五、二・〇

焼成は軟質で、灰色を呈する。野線上に「百八十七本」と陰刻される。

(丁)の願文の奥書にあたる部分が二片あり、結縁者の名前で従来小町塚で確認できる人物もあつたが、その多くは新出名で、⑮も同様である。

⑯法量 最大縦六・三、横八・七、厚さ平均二・〇、左右欄外幅表一・六、裏一・九、下欄外幅表裏ともに二・〇、行間表裏ともに一・八、一・九

焼成、色調とも①に同様である。

(表)

秦存犬

宗行度

伴

(裏)

道行西

尼上僧印西

表の欄外には「  羈臾」と陰刻される。

①⑦法量 最大縦六・〇、横八・九、厚さ平均二・三、左右欄外幅

表一・八、裏一・七、行間表裏ともに一・九

焼成、色調とも①と同様である。

(表)

  毗沙王字   

尼西妙尼   

  藤原氏子   

(裏)

  念   

  法妙清   

  房沙弥   

表の欄外に「三野常二  」、裏の欄外に「聖藏坊了業」とある。

以上、十七片の瓦経についてその復原的研究を行ったが、経文の

対校あるいは諸家に所蔵されるこれら十七片と前後する瓦経と比較した結果、この十七片が小町塚瓦経の可能性が強くなった。ことに小町塚瓦経を考察するうえで三片の願文の奥書部分は重要となつてこよう。

## 二 所見

これら十七片の瓦経の出土地が小町塚であることについて、以下の三点から明らかにしたい。

(一)瓦経の法量 十七片の多くが破片資料であるのもとの正確な寸法を推定することはむづかしいが、②が比較的よく残っているので復原すると、縦二四糎、横三一糎となる。東京国立博物館に所蔵されている完形の瓦経(縦二三・七糎、横二九・三糎)は、ほぼ小町塚瓦経の基準をなすものと思われ、②もほぼこの寸法に近い。さらに経文の字配りは、一行十七字詰を原則として表裏それぞれ十五行で構成していたことも判明する。時代的に前後する他の瓦経と比較すると、十七字詰十五行は、横長とならざるを得ず、従来の縦長形式から小町塚瓦経にいたって横長の瓦板に変化したものと想像される。それ以前の写経体をとっている応徳三年(一〇八六)の岡山県の安養寺瓦経、永久二年(一一一四)の福岡県の飯盛山瓦経はいずれも十行であり、これが普通の形式であった。延久三年(一〇七一)の最古の紀年銘をもつ鳥取県の大日寺瓦経は経典の種類によって瓦板の規格を変え、縦長、横長両形式が並行して行われた<sup>注4</sup>。こうした瓦板の形式の問題は、安養寺、飯盛山、小町塚瓦経で例をとるならば、平安時代後期の伝世写経の一紙分の紙質の変化との関係が考えられる。

十七片の罫線の引き方には小町塚瓦経特有の特色がみられる。殊に注目されるのが、四方の縁に面取りが施されている意味である。縦、横の罫線を引く際にまず縁に目印として「あたり」をつけ、これに従って罫線を引くわけであるが、線引きの後、この「あたり」

を消すために面取りが施されたものと想像される。さきの大日寺瓦経ではこれらの「あたり」がそのまま残存しており、これにつぐ安養寺瓦経にもこの面取りが確認できるわけであるが、小町塚瓦経ほど深くない。このことは縁に錐状のもので「あたり」をつけたのか朱墨を用いたのかということにもかかわってこようが、大日寺瓦経の場合、錐状のものと墨を併用しているものもある。小町塚瓦経の面取りの深さは錐状のものを併用したのではないかということ予想させる。それぞれ瓦板を精査したが、こうした「あたり」の痕跡は確認できなかった。四方のいずれかの縁の残っている例で野線の引き方をみると、②では表裏とも横野線は縁まで及ばず、縦野線も横野線とは交差しておらず、④では表が縦横野線が交差しているのに対し、裏は交差していないなど、縦の野線の引き方には一定の法則がなかったようである。この点、さきの安養寺や飯盛山の瓦板には一定の法則があり、一定の法則がなかったところに小町塚の瓦板の特色がみられる。

小町塚瓦経を特徴づける一つに丁付の記載方法があげられよう。瓦板の前後を識別するためにもその順序を示す番号が必要だったわけであるが、この丁付の場所は一定ではなく、小口にあるもの、表欄外右、裏欄外上にあるものもあるが、小町塚の場合は裏欄外左に「理五」とか「七巻八」とか陰刻されている。④の「大日□□」、⑤の「大日二巻十」、⑥の「蘇後下之□□」などは、このことを表わしているわけであるが、これまでに確認されている諸家所蔵のもので多くある大日経に例をとると、必ずしも一定の方式は採られていなかったようであり、かなり簡便に記載されていたことがわかる。<sup>注5</sup>

(二)陰刻の誤写 十七片の復原の際にも指摘したように、経文の陰

刻にかなりの誤字、脱字が認められる。こうした誤字、脱字、脱行の修整法についてはかつて論じたことがあるが、一行の脱行のために一本の縦野線を削り、そこに三行分の経文を陰刻したり、脱行分を欄外に陰刻しそのことをハイフオンで示したりするものもあった。誤字については、誤った文字を削り落しそこに改めて陰刻したり、あるいは脱字の場合は小文字で経文と経文の間に陰刻するなど、丁寧に行っているものも多くあった。<sup>注6</sup>しかし、この十七片でみる限りでは誤字は全く修整されておらず、また余分な経文が陰刻されているなど、修整は様々であったようである。こうした経文の誤写は特に小町塚瓦経について顕著であり、大日寺瓦経にも一部その傾向はあるが、他の瓦経については校訂がいきとどいていたのであろうかほとんど誤写はない。

(三)書風 小町塚瓦経は何人の人々によって製作、写経されたのであろうか。この十七片のうち幸いにも大日経四片についてはその前後の瓦経もあり、その書風を比較するとほぼ同手ではないかという結論を得た。このことは瓦板に直接陰刻したのか、あるいはまず朱書きで経文を書きそのうえを錐状のもので陰刻したのかという、経文写の方法が明らかになれば説得力をもたないが、これまでのところ書風の研究は皆無であり、今後はこうした連続する瓦経の書風を比較しなければならぬ。

瓦板の焼成は堅質のものも軟質のものもあり、さらに色調も灰白色あり灰黒色ありで、焼成、色調は一定でない。こうしたことは、瓦経製作にかかった日数にも関係がある。現在のところ「五月廿一日」「五月廿七日」「五月廿九日」「六月八日」の月日が確認されているが、これら銘文からのみみると、承安四年五月から六月にか



けての二カ月で製作されたことになる。小町塚瓦経についてはその焼成地が渥美半島の伊良湖郷の瓦窯で焼成されたことが明らかにされているので、総合的に理解していかなければならない。

以上、本館蔵となった十七片の瓦経の復原的研究に主眼をおき、これらが小町塚瓦経ではなかったかということをも三つの観点で考察してきた。十七片が小町塚瓦経であることが納得されようが、瓦経は小町塚に限らず他のも安養寺以外はいずれも散佚してしまっており、その全貌が理解できないことは諸氏の指摘の通りである。しかし、全貌が理解できないとはいっても、このように諸家が分蔵する資料を整理し、出土地を明らかにしていくことが重要である。小町塚瓦経はことに經典の種類が多く、<sup>註7</sup>現在推定している復原枚数が千枚に近いことを考えればなおさらである。

これまでの研究では小町塚瓦経をもって瓦経製作が終焉をむかえたとされている。石田氏が指摘した承安五年に法然上人が浄土宗を開宗することが一つの目安となることも事実である。しかし、かつて瓦経の書風という観点から中村直勝氏が京都市の今熊野瓦経が鎌倉時代のものではないかと結論づけられており、こうした点をも総合的に検討しなければならない。

(難波田 徹)

〈注〉

- 1 和田年弥氏「伊勢小町塚瓦経の研究」(『三重考古』第三号)
- 津田守一氏「菩提山出土の瓦経について」(『伊勢郷土史草』第十二号)
- 2 網干善教氏「関西大学考古学資料「瓦経」片の復原―秘密三経について―」(『日本文化史論叢』所収) 同氏「国学院大学蔵「瓦経」片の

復原研究」(『国学院雑誌』第七八巻九号)

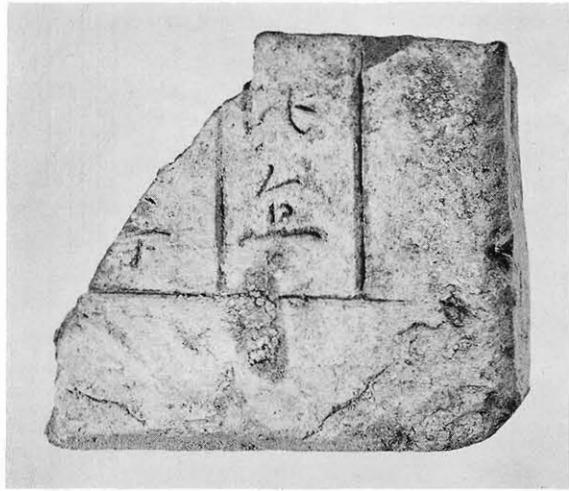
3 拙稿「京都国立博物館蔵瓦経片の復原的研究」(『ミュージアム』第三五二号) 同「瓦経の規格性―大日寺と小町塚の瓦経を例として―」(『ミュージアム』第三六六号)

4 石田茂作氏「瓦経の研究」(『瀬戸内考古学』第三号) のち『仏教考古学論攷』三経典編所収

5 拙稿「伝鳥取・大日寺出土の瓦経」(京都国立博物館『学叢』第二号) 註4石田氏『前掲書』

6 註3に同じ。

7 小町塚瓦経の經典としては、法華経(開結共)、大日経、金剛頂経、蘇悉地経、般若心経、理趣経、宝篋印陀羅尼、梵字真言などが確認されていたが、さらに随求即得陀羅尼、金剛界礼懺文などが加わり、金剛界、胎藏界曼荼羅瓦板もあったことが明らかにされている。すなわち十二種類である。この十七片のうち十五片は従来確認されているものに属する。一経塚に含まれる瓦経の種類としては、康治二年(一一四三)の兵庫県の常福寺瓦経の二十二種について多い。また枚数については最近になって和田氏が四一二枚と確定されたが、いま私が気付いた範囲で云うと、蘇悉地経は別本一と別本二が製作されており、和田氏の場合は別本二のみで復原枚数を確認されているので、別本一を加えるとかなりの枚数が増えるものと想像される。



裏



表

①法華經方便品第二



裏



表

③法華經信解品第四



表



裏

瓦經片 京都国立博物館藏



裏



表

④大日經卷二



裏



表

⑥大日經卷三



裏



表

⑤大日經卷二



裏



表

⑦大日經卷三



裏



表

⑧蘇悉地經(別本二)卷二



表



裏



表

⑩金剛界禮懺文



裏



裏

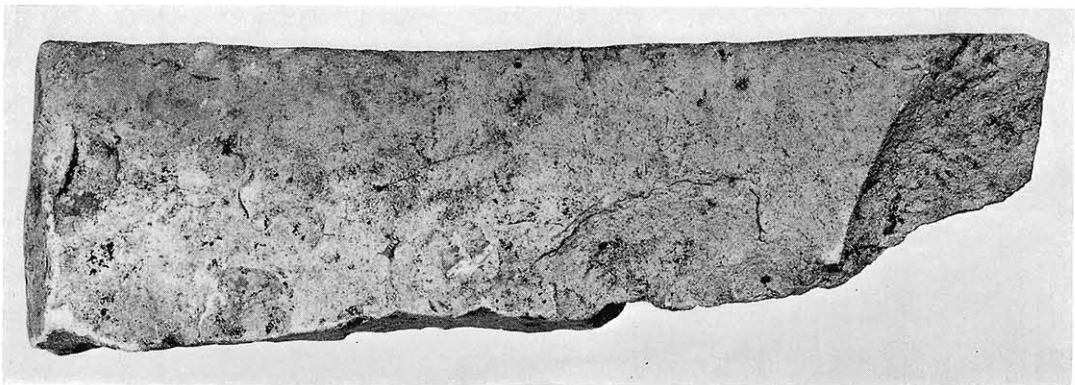


表

⑩ 蘇悉地經 (別本二卷下)

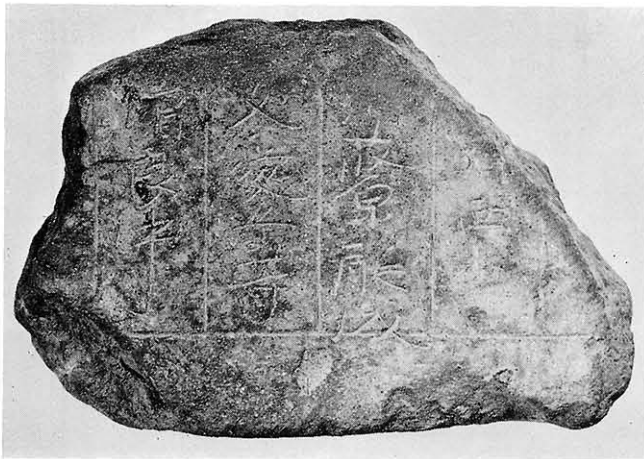


表

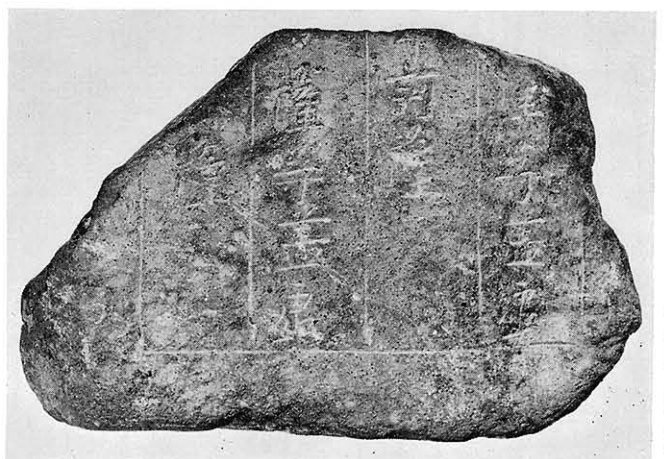


裏

⑭ 悉曇瓦經



裏



表

⑬ 金剛界札懺文



裏



表

⑬ 般若心經



裏



表

⑮ 悉曇瓦經



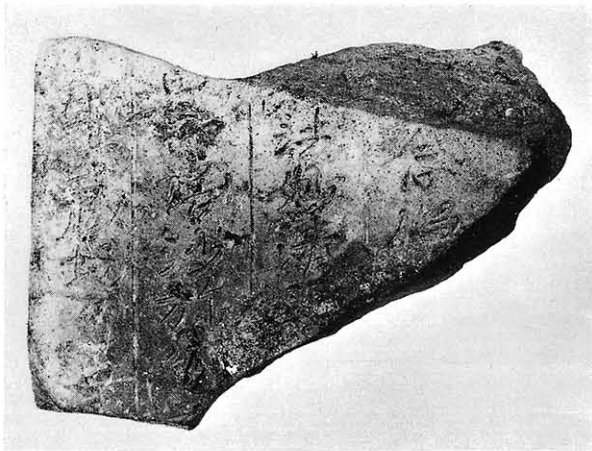


裏



表

⑯願文



裏



表

⑰願文

瓦経片 京都国立博物館蔵